

Title	書評：カカ・D・イラル著(木村真希子・南風島渉訳)『血と涙のナガランド：語ることを許されなかった民族の物語』コモンズ、2011年
Sub Title	
Author	中田, 英樹(Nakata, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.151- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0151">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0151</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：カカ・D・イラル著（木村真希子・南風島渉訳）

『血と涙のナガランド—語ることを許されなかった民族の物語』

コモンズ、2011年

中田 英樹

---

インドとビルマの国境地帯の標高二千メートル級の山々が連なる山岳地帯に、ナガランドと呼ばれる地域がある。インドとビルマが、第二次世界大戦後にイギリスより独立して国民国家を確立すると同時に、このナガランドに暮らすナガ民族は、少数民族として両国へと分断され、虐殺や殺人、拷問や強姦といった著しい人権侵害に苦しんだ。

本書『血と涙のナガランド』は、この分断され被抑圧を強いられるナガ民族が、一九四七年からの六〇年以上にもおよび繰り返してきた、自らの独立国家を勝ち取らんとするたたかひの歴史を、著者の現地での詳細な聞き取り調査に基づいて描いたものである。本書の英語原著版は、ナガ民族の歴史をひた隠しにするインドにおいて出版社はみつからず、五千部が自費出版として公刊されたが、それも口コミにより二年で完売された。

著者のカカ・ディエヘコリエ・イラルは、ナガランドで一九五六年に生まれた。それはナガランド連邦政府の樹立が宣言され、武装闘争がはじまった年である。後にインドのオスマニア大学にて哲学の修士号を取得した彼は、「とくに文章を書く訓練を受けたこと」もなかったものの、自らのナガ民族が抑圧され人権を侵害されている状況を世界的に訴えるべく、一九八〇年代からジャーナリストとしてペンを取るようになった。

ナガ民族を抑圧するインド側の人間であっても、そのたたかひの先鋒にたたかれた貧しいインド兵には「インド政府による政治的な虚偽を維持するための犠牲者である」と述べるように、この著でのカカとは、ひとつに第三者的な視点を意識するジャーナリストである。だが同時に彼は、ナガランド州都コヒマに広く暮らすナガ民族のひとつアンガミ部族のひとりでもある。ナガ民族の一員として、たたかひの内部を生き抜いた者として、その描写は人間的で感情的である。そしてさらにはそれゆえに、書きたかったが内部者として書けなかったことへのきわめてデリケートな葛藤が随所に感じられる。

例えば本書がとりあげるナガ民族独立運動の時代とは、もともと拷問や虐殺の激しかった独立運動の初期にあたる五十年代から七十年代に絞られている<sup>1)</sup>。この時期における独立運動に関する資料は、現在においても「インド政府の情報統制のため、質量ともに非常に限定されており、ゆえに本書は「初期の部分に関して知ることのできる」数少ない貴重なものだといえる。だが他方で本書は、「一九六〇年代のインド政府との停戦と和平交渉の開始を皮切りに、政治的な交渉に携わった一部のインド人行政官」や研究者などが発表するような、あるいは「ナガ人

中田英樹「書評：カカ・D・イラル著『血と涙のナガランド—語ることを許されなかった民族の物語』  
『三田社会学』第17号（2012年7月）151-157頁

の学生や知識人層が人権団体を結成し」新たな方向への運動を展開していった八十年代以降の闘争史は扱っていない(訳者解説)。

つまりナガの独立運動は、とりわけ八〇年代に至って「分裂した派閥同士の争い、さらには両派を支持する人びとをも巻き込んだナガ民族同士の争いが、ナガの人びとの生活を蝕んでいった。本著が一九八〇年代以降のナガランドの状況について触れていない理由は、民族同士の対立への言及が著者の身の危険につながるためである」(訳者解説)。実際著者は、派閥同士の争いに巻き込まれ、誘拐され殺されかけている。

「ナガ民族」のたたかひの内部者としてのカカの立場からは書きえなかったこの部分には、いかなる論点が隠されているのだろうか。評者はここで以下、次の最終着地点としての問いかけを目指して少し議論をしてみたいと思う——国民国家における社会的少数集団として被抑圧に苦しむ民族の解放は、分離独立を求め自ら国民国家を勝ち取ることであり——これで話はこと足りるのか。

宗教や、民族、あるいは人種が異なるがゆえに国家のなかでマイノリティとしての不正義を被る人たちが、自らの独立国家成立を願う——その権利あるいは少なくともその想いの重さを、評者は見積もるつもりはない。だがナチズムの虐殺を生き抜いたユダヤの手にした国民国家イスラエルがパレスチナの人たちにもたらしている意味を引き合いに出すまでもなく、この著の文脈においてもすでに、ナガ民族にとって暴力装置でしかないインドもまた、そもそも大英帝国の植民地支配下で苦しむ人びとを解放した国民国家であり、ガンジーが非暴力主義を掲げたたたかひ、マザーテレサの献身した国であったはずだ。

そしてこうしたたたかひが内部に抱え込まざるを得ない矛盾は、「ナガ民族」としての独立国家建設へのたたかひにも通底している。

カカはナガのなかでもアンガミ族の出自である。それゆえかこの著は、「初期の民衆運動を主導したナガの英雄」アンガミ・ザブ・ピゾを支持する兵士たちのコヒマにおけるインド軍との攻防戦(第二章)や、アンガミ族でナガ軍最高司令官だったモウ将軍の指揮による輝かしい戦記(第八章、第九章、第十章)に関して、多くのページを割いている。日本語版訳者が「本著に通底する、陰惨さをユーモアで紡ぐ表現や、好戦的にさえ読める主張などに、眉をひそめた読者も多いかもしれない」と述べたのは、こうした戦記だろう。

そして一方で、カカのアンガミ族ではないセマ族の人たちは、アンガミ族のモウ将軍が中国へ武器調達に出かけているあいだにナガ民族から分裂しインドに懐柔し、帰国した将軍をインドに売った裏切り者として描かれている。だがこのセマ族とは、上位で「ナガ民族」として括られながらも、もっとも被抑圧の苦しみを被った集団のひとつであった。

彼ら分裂派〔セマ族〕のなかに、現状に対する深刻な不満があったのは事実である。だが、彼らは理解を得ようとする代わりに、自分たちの政府を結成したのだった。〔中略〕闘争の初期の段階、とくに一九五五年～五九年の間、セマ族はインド軍の怒りの矛先となっ

ていた。その結果、セマに属する一九〇もの村すべてが、灰と化したのである。(邦訳 212 頁)

もともとナガ民族とは、それとしての「我われ」という意識で統制されていたわけではなかったらしい。アンガミ族やセマ族、コニャク族といった諸部族に分かれ、しばしば敵対関係にすらあった。だがイギリスが植民地支配をしていた十九世紀より、この茶園として利益をもたらすナガランドも支配下に置こうと試み、これら諸部族は激しく抵抗する。これが、ナガを構成する諸部族において、ナガとしての「我われ」を形成する基盤となった。「私たちの父祖は強大な大英帝国に対して、勇敢にも百十五年間にわたって抵抗を挑み続けた」——このような「ナガ民族」という意識の歴史的起原である。

だがすでに「ナガ民族」を抑圧するインドやビルマとたたかい、「ナガ民族」の独立国民国家を勝ち取る——このためのたたかひのプロセスそのものにおいて、すでに「ナガ民族」という全体集合のなかで声をかき消される少数集団としてのナガの人びとが、絶え間なく括りだされているのだ。大英帝国からインドが独立するプロセスそのものに、「ナガ民族」という少数集団がインド国民国家の体内へと身籠もられていったように。

もちろん、どのように細かく集団を括ったとしても、ひとたびその内部へ視線を投げれば、そこに多様性はある。だが重要なのは、その多様性ではなくそれを維持する構造的な内部力学であり、ここでそれを具体的に言うならば、「ナガ民族」をまとめ率いるという前衛主義に貫かれた軍と、それに牽かれるか弾きだされるかしかない無力な村人である。

ナガ民族というのは、人類学者によっては「首狩り族」として有名だそうだ。二十世紀前半には、西洋の文化人類学者が膨大な研究を残したが、そのトーンとは著者カカによれば「情け容赦ない、人間の生命を尊重しない、冷酷で野蛮な行為」というものであった。これに対してカカは「むしろ、ナガは非常に信心深い人びとであり、土地の慣習に従い、あらゆる声明に対して深い尊敬を抱いていた」と反論するのだが、それはさておき評者が問題にしたいのは、それがたとえ独自の太古からのナガの尊敬に満ちた伝統儀礼であれ、そのようなものが閉じた村落共同体のなかで生まれ続けていることをナガ軍がどのように眺めていたとカカは考えていたのだろうか、ということである。

ある行軍のなかで、この伝統風習がまだ維持されている村を通った。そこは、植民地支配やそれからの解放、大いなるナガなる祖国の建設といった大義とは無関係の、しかしナガの村だった。

この地域にはまた、多くの後進的なナガの村々があり、一部ではいまだに首狩りが行われていた。この時期、部隊が通過した多くの村では、人びとが祭りを楽しみ、ご馳走を食べていた。儀式の一環として家々の柱に塗りつけられた動物の血が、行軍する兵士たちの気分をいだかせる。村々のモルン（「村の集会所。ここでナガの伝統や文化が伝えられ、受け継がれていく」）

には、木の棚に人間の頭蓋骨が何列にも並べられていた。

敵対的な村に出会ったとき、ナガ軍を通してくれる暗号のような働きをした言葉があったとカカは述べる。「われわれは、ピゾの軍隊である」

このように本著には、アングミ族やセマ族といった諸カテゴリーを越えた「ナガ民族」としての「我われ」が独立国家を勝ち取ろうとしているのだという前提で前衛に立つ軍と、それが敵とするインド政府に挟まれながら、「我われ」ナガに敵対するか賛同するかという二者択一へと追い込まれ犠牲となる村人たちが、断片的に次々と現れる。

先述の中国遠征の行軍記において、一行はビルマ領へと分断され統合されていたナガ民族のひとつ、コニャク族の人たちに出会った。

密林地帯からあまり出たことのない、ナガの諸部族のなかでももっとも敵対的で、荒っぽい部族である。〔中略〕ナガ民族評議会の影響が行き渡っていないナガ地域が残っていた〔中略〕近代火器の威力を実演して見せると、村人たちは恐れおののき、以後部隊はとも丁重に扱われる。彼らは村へ迎え入れられ、代金と引き替えに食料を受け取った。(邦訳199-201頁)

もちろん、ナガ軍を構成する少年少女を含む兵士たちもまた多くが、圧倒的多数が家族や友人をインドという国民国家によって奪われた者たちであろう。だが虐殺や強姦、拷問にあった村人とは、真っ先にたたかいへ身を投じると同時に、またそのたたかいで疲弊し、苦しむ人たちでもある。

ナガ軍は、武装闘争をはじめて二十年あまり経った一九七四年、中国へ再度の武器援助への遠征をおこなう。一四〇名が出発したものの、中国にたどり着けたのは、わずか十名という厳しい結果となった。少佐をはじめとする三名が村で食料を調達にでかける。インド政府による戒厳令下の村であった。台所の勝手口に押しかけた。家の主は驚きつつも、寝室へと匿い、妻が紅茶を振る舞った。しかし、「村の近くにナガ軍部隊が隠れている。近隣の家から食料を調達したい」と申し出ると、「突然、男は部屋を飛び足すと、大声で叫びはじめた。『泥棒だ！泥棒だ！』。裏切ろうとするその村人を、ドプリエは容赦なく撃ち殺すこともできた。しかし、村々がひどい緊張と恐怖に包まれていることも知っている。彼らは軽機関銃の引き金に指をかけたまま、窓から飛び出し、叫び声で騒然とする村をあとにした。部隊の隠れ場所に戻り、任務の失敗を告げると、多くの兵士が涙を流した。誰もが、ようやく食べ物にありつけると期待していたのだ。」(邦訳270頁)

こうした断片的に挿入されるエピソードにこそ、カカがこの著から発する、私たち自身が最も学ぶべきことがあるように思われる。長きにわたる武装闘争がもたらした、圧倒的な数の犠牲者について。その犠牲が正当化されてきた、あるいはされるしかなかった「ナガの国をつくる」という大義名分について。そしてそのたたかいが繰り返されてきた歴史を、世界の片隅

に押しとどめ黙殺してきた外部の私たちについて。

カカは本著を次の出来事で締める。武装闘争を主張するナガの一派とインド軍との相次ぐ報復合戦の最中で、村ごと虐殺の対象となったナガの、とある村である。

一九六〇年。ナガの指導者ピゾが、ロンドンへ逃れ、『ナガ民族の運命』をまとめBBCで記者会見を予定する。この暴露を嫌がったインド政府は、ナガ民族評議会から分裂したナガ人民会議の全代表を招集した。ナガランド州として承認、合意を取り付け、ピゾの暴露を無効化しようというのが狙いである。「一六か条合意」が取り付けられた。ピゾは、このナガ側の署名者たちがナガの人びとからいかなる権限も与えられていない、とプレスに発表するも「インド国ナガランド州」という傀儡政権が樹立された。

これに対し、ナガランド連邦政府は、ポチュリ地域ポル村付近のアッサム・ライフルのトゥダ駐屯地を「インドに操作されたこの裏切り行為への抗議として」攻撃する。インド空軍兵九名を捕虜にとるなどした。「これを契機に、インド軍はポチュリ地域で猛攻撃を展開。ポル村周辺の多くの村が、灰となる。九月一日には、ポル村の六人の村人たちが拷問によって死亡。二日後、イェシ村の三人、モケ村の二人の村人が、殴打されて亡くなった。ラルリ村では、リンサンが醜い拷問の後、生き埋めにされた」。捕虜となったインド兵九人は赤十字を通じて釈放されるも、「インド軍は復讐の怒りで荒れ狂っていた」のである。(邦訳 302 頁)

このトゥダ駐屯地を攻撃したナガ軍兵士に食糧を供給していた村がある。フツ村という。このフツ村に、地形のよく似ているマティクル村というのが遠いところにあった。「小さな岩山の頂上に位置し、村の下にはテツ川やティズ川が広い谷間を流れていた」。ただそれだけのことである。

たんに見間違えられただけで、このマティクル村は報復の対象となった。すべての成人男性はあばら骨を折られ、体中を骨折させた。村は全部灰と化した。現在はポチュリ学生連合によって、この九月六日は、「喪に服する日 black day」と称され、追悼日とされている。カカは、二〇〇二年の追悼日に訪問した、この時のことを記して、この著は終わる。カカは言う。

悲劇的な過去の焼け跡と断末魔の苦しみから、マティクル村は再び立ち上がり、ナガランドに存在する何千もの村のひとつとして再生した。[中略] 歴史の残酷さと時代の荒波に逆らい、マティクル村は、ナガ民族の魂と愛国心の象徴としてたち続けている。(邦訳 310 頁)

大義の正当性いかに関わらず、武装闘争によって最も不条理な苦しみを強いられるのは、子供や高齢者、そして女性である。ナガ軍義勇隊の野営地設営を支援したとして、一九五七年、インド軍の襲撃に遭い、女性の多くが暴行されたウングマ村を描く第四章に、監禁され強姦を繰り返された女性が、カカに辛いこの経験を語り終えた最後に、次のように述べた。

それは声を発する位置をどこにも占めることのできなかった無力な女性のちいさな解放である。

これで、私は安らかに死ねるよ。あなたが私の頭の中から一切をもって行ってくれたからね。(邦訳 77 頁)

本著が記したナガの人びとが自ら独立国民国家を求めて立ちあがった一九五〇年代から、すでに半世紀以上が経った二十一世紀のこの現在。グローバリゼーションのもと、カネ、モノ、そしてヒトがどれほど国境を越えようが、国民国家という境界はその役割を多様に変化させ、確固として存在する。そしてその国民国家のなかで、文化や宗教、そして民族を異にする人びとが、それだけの理由で一方向的に人生の選択肢や可能性を著しく制限されている。

私たちの現代史が孕んできたこの問題に対して、今日にいたり豊穡に蓄積されてきた議論のひとつに、多文化主義あるいは多民族主義といった考え方があつた。マイノリティとしての生を強いられた人たちが、この「多-」を梃子の支点にして、国民国家という枠組みのなかで要求を出し議論を蓄積し、たたかい、そして裏切られてきた。

一方で、この独立国家を勝ち取ろうとするナガの人たちの闘争史がある。唯一の生き延びるための選択肢として、インドやビルマへの国家統合を拒否し、武力で独立国家を求めてきたナガの人びとの独立運動を描いたこのカカ著『血と涙のナガランド』。本著で取りあげられたこの人たちのたたかいは、独立運動初期の一九五〇～六〇年代であるという「時代の古さ」は、思わぬ落とし穴になり得る。分離独立というたたかいは古く、国家のなかにあつて多民族・多文化主義を掲げる運動が新しいという解釈へ私たちが安座させようとするからだ。

評者はラテンアメリカを研究対象としているが、たしかに被抑圧に耐えてきた人びとが革命政府を樹立せんとするたたかいは、ラテンアメリカにおいて結局すべて、最後には負けてきた。一方で一九九四年よりはじまった、メキシコ南部チアパス州にて、「メキシコは自由・平等の民主主義国家だ」という国民国家の前提を精一杯流用し、多民族・多文化主義に立脚して開始された先住民主体の武装闘争サパティスタ民族解放軍のたたかいは、世界的な共感を呼んだ(呼んでいる)。だがサパティスタのたたかいは、十五年以上が経った現在、経済的・社会的・国際世論的に外堀を国家によってジワジワとしかし強固に埋め尽くされ、きわめて厳しい状況にあるといわざるを得ない。

被抑圧に苦しむ少数民族において、国民国家からの分離独立を求めるのか、それとも国家の枠組みを引き受けたなかで多文化主義・多民族主義の社会構築を求めるのか。ともすれば後者のみを議論の俎上に載せていることに無自覚な私たちへ、このカカ著『血と涙のナガランド』は、ストレートに素朴な論点を突きつける——ポスト・コロニアルであれポスト・モダンであれ、国民国家におけるマイノリティの問題とは、この現代社会においてもしっかりと居残り続

けている。多民族主義の運動であれ民族独立運動であれ、じつは議論の様相をまったく異にしつつも、同根にはある根源的な問題を共有しているのであり、そこまで遡って考える必要があるのではないか。つまり、「ポスト」などと冠される遙か以前から私たちが抱えてきた、国民国家統合というものが孕む抑圧の問題である。

【注】

- 1) ナガ民族評議会は五〇年以上におよぶインド・ナガ戦争で二〇万人のナガ人が命を失い、そのうち実に七〇%は一九五四年～六四年のことと報告している。(319 頁)

(なかた ひでき 明治学院大学)